

國學院大學學術情報リポジトリ

光源氏の〈愛敬〉考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000778

光源氏の〈愛敬〉考

大津 直子

キーワード

愛敬 愛楽 愛行 光源氏 第一部世界

はじめに

光るように美しい光源氏の姿は、物語の始発から、様々な表現によって、様々な登場人物のまなざしを通して称揚される。本論では、光源氏の人物造型について、〈愛敬〉という表現から考察する。始発とするのは、第一部世界から第二部世界にまたがる、二人の人物による光源氏批評である。一人目は、夕霧を婿に迎えることを決心した、「藤裏葉」巻の内大臣である^①。

御冠などしたまひて出でたまふとて、北の方、若き女房などに、「のぞきて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。用意などいとしづかにものものしや。あざやかにぬけ出でおよすけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。かれはただいと切にまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公さまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。これは才の際もまさり、心用の男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえためり」などのたまひてぞ対面したまふ。

〔藤裏葉〕三―四三六―四三七頁

装束する内大臣は、緊張しながら訪問した夕霧の姿を、北の方と若き女房たちに覗いて見るように促す。はつきりと群を抜いて老成する点は、父光源氏と比較しても勝っている、と内大臣は夕霧を絶賛する。冷泉帝後宮の寵愛争いをはじめとして、長く光源氏方と内大臣家は対立してきた。第一部世界が終焉へと向かうこの巻において、内大臣は夕霧を藤の宴に招き、両家の和解が語られることになる。今まで、内大臣は強く夕霧を排除してきた。当然内大臣家の人々はそのことを知っていたし、時に批判の言葉を耳にすることもあっただろう。右の内大臣の発言の意図は、婚儀の前に、家人の抱く夕霧の評価を据え直すことにあったと考えられる。しかし一方で注目されるのは、夕霧の比較対象として父親である光源氏が話題に引き出されていることである。ひたすらなまめかしく〈愛敬〉があつて、見るだけで自然とほえまれてしまう。一見光源氏を礼賛する様な言葉は、「公さまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし」というやや批判的な人物評へとつながってゆく。内大臣の批判は、長らく対立してきた光源氏への、単なる嫌みなのだろうか。

光源氏の批評をする今一人の人物は、未婚の姫宮の処遇に頭を抱える「若菜上」巻の朱雀院である。こちらでもやはり、朱雀院の女房たちがやってきた夕霧をのぞき見る。若女房が夕霧を礼賛すると、老女房がかつての光源氏には匹敵するべくもないと応戦する。朱雀院は、次のような言葉で両者に割って入る。

：「まことに、かれはいとさまことなりし人ぞかし。今はまた、その世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆるにほひなむ、いとど加はりにたる。うるはしだちて、はかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを、またうちとけて、戯れ言をも言ひ乱れ遊べば、その方につけては、似るものなく愛敬づき、なつかしくうつくしきことの並びなきこそ、世にありがたけれ。何ごとにも、前の世推しはかられて、めづらかなる人のありさまなり。宮の内に生ひ出でて、帝王の限りなくなしきものにしたまひ、さばかり撫でかしづき、身にかへて思したりしかど、心のままにも驕らず、卑下して、二十がうちには、納言にもならずなりにきかし。一つあまりてや、宰相にて大将かけたまへりけむ。それに、これはいとこよなく進みにためるは。次々の子のおぼえのまさるなめりかし。まことにかしこき方の才、心用るなどは、これをもさをさ劣るまじく、あやまりても、およすけまさりたるおぼえ、いとことなめり」など、めでさせたまふ。

〔若菜上〕四―二五―二六頁

老女房たちの褒めそやすかつてもさることながら、今の光源氏は一層立派になり、本当に光るとは彼を言うのだろうと実感するような

美しさが増すばかりだ。格式張って信頼すべき方面のことは威厳も十分で、きわだって正視出来ないような気持ちになるが、はたまたうちとけて冗談などを言くと、比類なく〈愛敬〉づき、何とも慕わしい愛らしさが誰よりも勝るといふ、希有な人である。——右でもやはり、光源氏の〈愛敬〉が話題に上っている。加えて、この性質は「うちとけ」た状態において素晴らしく感じられるといふのである。朱雀院の言葉は、内大臣が「公さま」といふ言葉を用いたことと通底している。朱雀院は、若く将来有望な夕霧を、女三の宮の婿候補として見ていたであろう。朱雀院の言葉は官位の昇進という点において夕霧は光源氏を引き越したのだから、あながち父親に劣らない人物に成長した、とやはり夕霧を礼賛しておわる。

内大臣と朱雀院の光源氏批評において注目すべきは、以下の四点である。一点目は、〈愛敬〉が第一部世界で敵対した両者が一貫して、光源氏という人間に見いだす特質であること、二点目は光源氏の〈愛敬〉が特に「公さま」といふ視点を投影したときに批判的にもうつること、三点目は、夕霧への評価が光源氏の介在なくしてはなされないこと、四点目は夕霧には光源氏の〈愛敬〉は引き継がれていないことである。本論は〈愛敬〉を光源氏の人物造型の淵源を支える資質ととらえ、以下考察を試みる。

一、〈愛敬〉の語感

(一)〈愛敬〉の系譜

〈愛敬〉は、どのような形容なのだろうか。この言葉は、辞書解釈では阿弥陀如来や地藏菩薩の顔付きを指す「愛敬の相」といふ仏語から転じて、顔かたちがにこやかでかわいらしいこと、愛らしく、優しい感じがすることなどと定義されるのが一般的である。『日本国語大辞典』は〈愛敬〉のもととなった語とされる「愛敬の相」の初期の用例として、十世紀後半成立とされる『極楽遊意』を掲げるが、「愛敬づく」の用例はそれより数十年ほど遡る延喜十三年（九一三）三月十三日の『亭子院歌合』に既に見える。³「愛敬の相」と名詞〈愛敬〉、動詞「愛敬づく」の分化がいつ頃定着したのかは定かではない。ただし、後に確認するが、『源氏物語』の〈愛敬〉関連語の用例は面相に関わるものも多いから、この言葉が「愛敬の相」と関わりが深いことは確かである。

また一方で注意しなくてはならないのは、〈愛敬〉には「愛楽」「愛行」のようないくつかの近接する語があることである。⁴これらの語

の認定については、国語学的な先行研究において様々に見解が揺れている。小西甚一氏は、「敬」が「行」と書かれた例も多く、「愛楽」との関連も考えられるとし、〈愛敬〉の「敬」「愛行」の「行」「愛楽」の「楽」は、単に形の上からつけ加えたもので、意味はもっぱら「愛」の一字にあると論じ、表記上の差異を認めていない。^⑤ また、〈愛敬〉の用例が四書五経に一例もないとも指摘し、日本におけるこの言葉の源流が仏教の經典に求められると論じた。原田芳起氏は小西氏の見解を引き継ぎ、古典には元来「愛す」という動詞が存在せず、「愛」という觀念自体が仏教説話の流行によつて浸透したと論じた。^⑥ 一方、大野晋氏は〈愛敬〉と「愛行」とを区別して扱い、前者を「欲すること」、うるわしいこと、尊敬し愛すること、愛し敬うこと^⑦、後者を「貪欲を意味し、あるいは思惑を指す。また柔順で、他人の言に従うことと、柔順、他人の言に従うというおおよそ通じ合う意を含むので、次第に〈愛敬〉と「愛行」との混交が起こったと指摘した。^⑧

近年は〈愛敬〉と「愛楽」とを別語と認定するのが主流である。一昨年刊行された『古語大鑑』（東京大学出版会 平成二十三年）において、前者は「①慈愛と尊敬。②愛情が深げで柔和なこと。愛らしく魅力的であること。年齢を問わず用いる」、後者は「①仏法などを深く信じ、我がものとしたいと、願ひ求めること。②親しみ、好むこと。③心をとらわれること。執着」とそれぞれに立項されている。漢文から漢語へ、そして和文脈へと取り込まれるまでいくつかの段落があり、変遷を追うことは容易ではない。^⑨ 例えば、『日本霊異記』中巻「心経を憶持する女の、現に閻羅王の闕に至り、奇しき表を示しし縁 第十九」には「愛楽ス」が動詞の受身の形で用いられる。天年澄情にして、三宝を信敬し、常に心経を誦持し、以て業行と為しき。心経を誦する音、甚だ微妙にして、諸の道俗の為に愛樂せられき。聖武天皇の御世に、是の優婆夷、夜寝ね、病まずして卒爾にして死に、閻羅王の所に到る。

（新編日本古典文学全集 一七八頁）

日頃、般若心経を誦経する女が、冥土で閻羅王を感嘆させたという話である。右の「愛楽」は、女の声が優れているため、「諸の道俗」に親しまれ、愛されるという意で用いられる。閻羅王までが彼女の声を愛でて涙を流したことをふまえると、他者の「愛楽」を呼ぶ彼女の声は、むしろ仏教の尊さを広める優れた資質であった。この用例は、次に掲げる『法華経』の用例と近似している。

若し女人ありて、設し男を求めんと欲して、觀世音菩薩を礼拝し供養せば、即ち福德・智慧の男生まん。設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の、宿、徳を殖えしをもて衆人に愛敬せらるるを生まん。無尽意よ、觀世音菩薩には是くの如き力有るをもて、

若し衆生ありて觀世音菩薩を恭敬し礼拜せば、福は唐捐からざらん。この故に、衆生は皆、応に觀世音菩薩の名号を受持すべし。

（岩波文庫「觀世音菩薩普門品」下二四八～二四九頁）

觀世音菩薩を信仰すると、容貌も人格も優れた娘を得るというくだりである。岩波文庫では傍線部に「また、娘を望む女性には、容姿うるわしく上品で優雅な娘が生まれる。しかも、この娘は蓮華さながらの、この上なく清らかな容色をもち、娘としての美点を具え、多くの人々に愛され、人の心を惹き、しかも善根を植えた娘である」という現代語訳が付されており、〈愛敬〉は「愛され、人の心を惹く」と解釈されている。「セラル」と動詞の受身形で用いられている点、〈愛敬〉が『日本靈異記』の「諸の道俗」と同様に「衆人」、つまり大勢の人々から注がれるものである点、〈愛敬〉を注がれることが善とされる点が、『日本靈異記』「愛樂」の例と共通しているのである。『法華經』のこの一節は『曾我物語』や『風姿花伝』などに引用される「衆人愛敬」という言葉の原典でもあり、古来「敬」以外の字が当てられていたとは考えにくい。これらの例を見る限り、かなり早い段階、少なくとも平安朝初期には、発音上も表記上も混交が起こったとする大野氏の見解が首肯される。そして、後述するが、和文脈が広がりを見せる平安中期、「愛敬づく」という語が発生すると漢語における境界は崩れる。〈愛敬〉は「愛樂」や「愛行」などの意味を吸収し、願い求めさせるほど、魅力的な様、欲望をかき立てるほどの魅力を添えている様子という形容へと変化してゆくようである。

また、日本に伝わった〈愛敬〉の語感には儒教の影響は見えないとされている。しかし、儒教的な語感は薄れてはいるが、全く消えてしまったわけではない。〈愛敬〉は、儒教、特に孝道においても重視される概念である。こちらは、「いとおしむ」意の「愛」と「慎み、恭しくする」意の「敬」と、独立した二つの語が結びついた言葉であった。儒教上〈愛敬〉は礼樂の基本である。皇太子の読書始に用いられた『孝經』天子章 第二においては、親に対する〈愛敬〉の重要性が解かれている。

子曰、愛親者、弗敢惡於人。敬親者、弗敢慢於人。愛敬尽於事親、然後德教加於百姓、刑於四海。蓋天子之孝也。

（新釈漢文大系 八九～九五頁）

天子が「愛」と「敬」の心で親に仕え、力を出し尽くすと、そのことで道德的教化が次第に広く行き渡るといふ。劉炫注に「愛と惡は俱に心に在り、敬と慢は並びに貌に見はる。愛とは隱惜にして内に結び、敬とは嚴肅にして外に形はる」とあるくだりである。¹⁰この注が日本でどれほど浸透していたかは問題が残るが、「愛敬の相」と同様、儒教の觀念においても〈愛〉と〈敬〉とが面相と関わるとされる

ことは留意される。

『源氏物語』には帝に関して〈愛敬〉が用いられることはない。しかし『うつほ物語』においては、二度、嵯峨の院に関して〈愛敬〉が使われている。

尚侍、「いかにすべきにか」と思ひわづらひ給ふほどに、嵯峨の院、近くおはしまして、「大将の朝臣にもせしことも、伝へ聞き給ひけむや。昔の人の勘事、罪あまるを、今は残りなくなりたる身なるを、この身に許し給はば、うれしくなむ」などのたまふ様、らうらうじく、愛敬づかせ給へり。

（おうふう・改訂版「楼の上・下」九二七頁）

右は、嵯峨の院が俊蔭娘に語りかけ、俊蔭を放逐した罪の許しを請うという場面である。嵯峨の院の〈愛敬〉は、柔らかな心根、仏教上の善根と言うよりは、儒教上優れた帝王としての資質を示していると考えられる。〈愛敬〉が面相に表れるとする発想の背景には、儒教的な影響も考えなくてはならないだろう。

（二）〈愛敬〉は美質か

それでは、『源氏物語』において〈愛敬〉はどのように用いられているか。物語中には関連語として、「愛敬」九例、「愛敬なし」五例、「愛敬なげなり」一例、「愛敬づく」四十二例が挙げられる。女性の会話文の中などにも散見されるため、『源氏物語』で用いられる漢語の中でもかなり一般化した言葉である。^①関連語では「愛敬づく」が突出して多い。接尾語「づく」が名詞に接続した場合、そのような状態になる、そういう様子が強くなる、という意になる。つまり、『源氏物語』は後天的に獲得される資質として〈愛敬〉を描く傾向にあるということになる。注目したいのは物語の用例において、〈愛敬〉は顔つきだけを指すわけではないということである。

物語など聞こえたまひて、「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意気色などよしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」とのたまふ。

（「蛩」三一—二〇七頁）

右は光源氏の蛩宮評である。蛩宮は、「容貌などはすぐれ」ないが「愛敬づきたる君」であるという。これは明らかに顔かたちではなく、内面性をさした用例である。類例としては、『栄花物語』にも、禎子内親王が「御顔などはえ見たてまつらねど」、「愛敬づ」くと評される

くだりがある（「楚王のゆめ」二一五三四頁）。したがって『源氏物語』前後の時代、〈愛敬〉は、姿全体やふるまい、人柄、声、果ては筆跡や奏でる楽の音色に至るまで、その人の資質を包括的に意味していると考えられる。

物語中で、〈愛敬〉があるとされる人物と形容される回数を示すと次のようになる。

〔男性〕 光源氏…十一例、柏木…二例、匂宮…二例、薫…一例、蛸宮…一例

〔女性〕 紫の上…七例、宇治中の君…四例、玉鬘…三例、近江の君…三例、浮舟…三例、秋好中宮…二例、軒端萩…二例、雲居雁…

二例、朧月夜…一例、明石の姫君…一例、宇治大君…一例、玉鬘大君…一例、宮の御方…一例、小宰相の君…一例、宮の君…一例

光源氏に十一例と集中しているものの、基本的には女性を形容する語である。「愛敬の相」は主に阿弥陀仏の相好を言うため、本来は男性の顔立ちである。そのため〈愛敬〉が右のように女性に偏って用いられることは特筆すべきことである。『源氏物語』においては、この語がだいたい原義から離れて成熟、定着していることがうかがえる。光源氏に生き写しであるとされる冷泉帝や夕霧には用いられていないことから、〈愛敬〉が遺伝的な資質でないことも明らかである。また、皇統譜に連なる人物に集中する形容というわけでもない。例えば、薫が誕生する場面では、明石女御腹の親王たちは「王氣づきて気高」いが、薫の方が気品に加えて〈愛敬〉があり、勝ると描かれている（「柏木」四—三三三頁）。血筋とは関わない資質が、〈愛敬〉の有無を左右しているようである。

面白いのは、近江の君のようなヲコ者にまでこの言葉が用いられていることであろう。〈愛敬〉の用例が集中する「常夏」巻の近江の君に注目してみよう。

容貌はひちちかに、愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなるを、額のいと近やかなると、声のあはつけさとに損はれたるなめり。とりたててよしとはなけれど、他人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし。

〔常夏〕三—二四三頁

右は、彼女の〈愛敬〉が始めて描かれる場面である。内大臣が弘徽殿女御の許に出仕したがる近江の君をたしなめている。内大臣から見て、近江の君は「容貌はひちちかに、愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなる」娘であるという。内大臣は娘の顔だち、姿かたちをまじまじと見ながら、「いと近やか」な額つきと「声のあはつけさ」こそが難点であるが、他はそれほど劣らないと評価する。そ

れもそのはず、彼女の造型や物腰は「他人とあらがふべくもあらず」、まるで鏡に映したように内大臣自身にそっくりであつたのであつた。注目したいのは「罪軽げなる」という描写である。のちにも近江の君の〈愛敬〉は「罪」という表現を伴つて出てくるからである。

例の、君の、人の言ふこと破りたまひて、めざまし。今はひとつ口に言葉なまぜられそ。あるやうあるべき身にこそあめれ」と、腹立ちたまふ顔やう、け近く愛敬づきて、うちそはれたるは、さる方にをかしく罪ゆるされたり。〔常夏〕三一二四七頁

近江の君が父内大臣のことを語る右の場面では、「腹立ちたまふ顔やう」が「け近く愛敬づ」ととされている。〈愛敬〉は、感情をあらわにした近江の君の表情に宿る。ここでも彼女の容貌そのものは、それほど劣るわけではないことが繰り返し強調されている。近江の君を滑稽に仕立てているのは、物腰や早口な話し方、つまり成長する過程で生じた後天的特徴である。「さる方に」、つまり彼女の出自の程度を考えればそこそこの魅力的であるという条件が付随しているが、内大臣の親の欲目を通さなくても、近江の君の容貌にはそれなりに魅力があるのであつた。右にもやはり〈愛敬〉ゆえに「罪」が「ゆるされ」という表現が出てくる。

彼女の罪とは一体何か。内大臣が近江の君の魅力を減退させる彼女の声に対して、「かくたまさかに逢へる親の孝せむの心あらば、このものたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ」〔常夏〕三一二四四頁〕と発言していることをふまえると、第一には不孝の罪であろう。先にも述べたとおり、『源氏物語』の描く〈愛敬〉からは、あまり儒教的な語感をうかがうことはできない。むしろ雨夜の品定めにおいては、女性が三史五経を会得することが「愛敬なし」とされる例もある（『帚木』一一八九頁）。ただし、近江の君の「罪」は、全て父内大臣と一族の恥となることを意味しており、親子関係に作用するという点において、先の儒教上の語感を活かした表現であることは間違いない。その一方で、内大臣を困惑させる近江の君の早口は、産屋で安産祈願をしてくれた大徳からうつされたものであつた。内大臣は上記の発言に続く近江の君との会話の中で、大徳の早口について「そのけ近く入り立ちたりけむ大徳こそは、あぢきなかりけれ。ただその罪の報いなり。瘡、言吃とぞ、大乗誇りたる罪にも、数へたるかし」と述べている（〔常夏〕三一二四五頁）。〔大乗〕とは、『法華経』のことである。内大臣は、大徳が前世で『法華経』を誹る罪を犯したために早口に生まれたのではないかと揶揄している。近江の君の「罪」は、大徳の前世の「罪」を引き写して生じたものでもあつたのだつた。つまり、近江の君の造型には、親の面目をつぶす儒教上の「罪」と、教典を誹るといふ仏教上の「罪」とが重ね合わせられ、それが、〈愛敬〉ゆえに許されるというレトリック上の面白味がある。〔常夏〕巻末、近江の君が弘徽殿女御方のよこした女房の返歌に感激する場面にも、紅をさし髪を整えた近江の君の様子が「さる方ににぎははしく、愛

敬づきたり」と評される〔常夏〕三―二五一頁。〔常夏〕巻で近江の君が活躍する間、彼女は一貫して〈愛敬〉づくつと評され、〈愛敬〉ゆえに「罪」が許されるという論理が繰り返される。内大臣方をおとしめる行動をするときに彼女の〈愛敬〉が強調される傾向は一貫しているといえよう。

従来〈愛敬〉は、王朝美の一表現として理解されてきた。⁽¹³⁾確かにこの表現は、何事も受け入れてくれそうな柔らかな愛らしさ、感情を包み隠さないことによって相手を感じる慕わしさが宿った状態を言う。しかし、近江の君の例をふまえると、この表現は単なる美的形容ではない。「相」とは、本人の意志、希望を超越する形でその人物の背負う本質や宿命を表象し、その人物に訪れる未来を示す兆しである。⁽¹⁴⁾文学作品に描かれる人間の「相」も、人間の宿命や行く末を規定してゆくものでもあった。近江の君の〈愛敬〉が描かれる時、同時にその「罪」が意識されてくる。これは、「顔やう」、つまり面相に現れる〈愛敬〉が、過去の因果と関わり、その人物の宿命や未来を指し示すものであったためであると考えられる。

それでは、『源氏物語』は、人々の〈愛敬〉をどのように描いているのだろうか。まずは、光源氏以外の登場人物の例を傾向別に見てゆく。

二、『源氏物語』の〈愛敬〉

(一)〈愛敬〉ある人々

① 姫君の〈愛敬〉

第一に注目したいのは、男性の心をとらえる姫君たちの〈愛敬〉である。多く、姫君の側が無意識であることが多いため、必然的に男性を知らぬ処女に関する用例が散見される。典型的な紫の上の例を見てみよう。

姫君の何ごともあらまほしうとのひはてて、いとめでたうのみ見えたまふを、似げなからぬほどにはた見なしたまへれば、気色ばみたることなど、をりをり聞こえ試みたまへど、見も知りたまはぬ気色なり。

つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつづ日を暮らしたまふに、心ばへのらうらうじく愛敬づき、はかなき

戯れごとの中にもうつくしき筋をし出でたまへば、思し放ちたる年月こそ、たださる方のらうたさのみはありつれ、忍びがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、人のけぢめ見たてまつり分くべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり。

〔葵〕二一六九～七〇頁

「葵」巻、光源氏は葵の上を亡くした左大臣家をとにし、久方ぶりに紫の上と対面する。幼い少女は、光源氏の知らぬうちに、利発で「愛敬」をそなえた心映えも申し分ない女性に育っていた。光源氏は、見過ごすことが出来なくなり、ついに新枕を交わす。この場面の紫の上は、光源氏の理性を決壊させる魅力にあふれている。しかしながら傍線部で「気色ばみたることなど、をりをり聞こえ試みたまへど、見も知れたまはぬ気色なり」とあるように、紫の上本人はこの段階でも結婚を匂わす光源氏の意図を全く汲みとることが出来ない。紫の上は、自らの「愛敬」が促す光源氏の変化に無自覚である。

姫君も、はじめこそむくつけくうたてとも思ひたまひしか、かくてもなだらかに、うしろめたき御心はあらざりけりと、やうやう目馴れて、いとしも疎みきこえたまはず、さるべき御答へも、馴れ馴れしからぬほどに聞こえかはしなどして、見るまにいと愛敬づきかをりまさりたまへれば、なほさてもえ過ぐしやるまじく思し返す。

〔常夏〕三二二三～三五頁

玉鬘についても、類似の表現が見られる。光源氏が「見るまにいと愛敬づきかをりまさる玉鬘への執着心をかきたてられている。しかしながら、玉鬘は傍線部で「はじめこそむくつけくうたて」と思っていた光源氏の下心を「うしろめたき御心はあらざりけり」ととらえ直し、危機感をゆるめている。このとき、玉鬘は身体はとうに成人しながら、実父に名乗り出ていないために、裳着を行っていない。男性とまみえる前の清らかな乙女の心根と、成熟した肉体との乖離が、やはり光源氏の情をそそのものである。

〈愛敬〉ある姫君たちは、異常なほど男性を惹き付けてゆく。こと、姉妹の造型においては〈愛敬〉のあるなしがそれぞれの運命を分けることになる。例えば、「竹河」巻の玉鬘大君中の君姉妹が好例である。

桜の細長、山吹などのをりにあひたる色あひのなつかしきほどに重なりたる裾まで、愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなどもうらうじく心恥づかしき気さへそひたまへり。いま一ところは、薄紅梅に、御髪いろにて、柳の糸のやうにたをたと見ゆ。いとそびやかななまめかしう澄みたるさまして、重りかに心深きけはひはまさりたまへれど、にほひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。

〔竹河〕五一七五～七六頁

右では基を打つ姉妹の様子が比較されて描かれている。裾までこぼれおちるほどの〈愛敬〉を称えられる大君と、「重りか」で「心深」と描かれる中の君とは、参院、入内をきっかけに大きく運命を分かつ。中の君が今上帝の許で安定した地位を得るのに対し、大君は冷泉院の寵愛を一身に集め冷泉院のお妃たちの不興を買うことになるのであった。

姫君たちの〈愛敬〉は、本人の無自覚なままに放たれる扇情的な魅力である。あふれる〈愛敬〉こそが、知らず知らずのうちに男性の情欲をそそっている。突如光源氏の妻となる紫の上をはじめとして、姫君たちの〈愛敬〉は、ある種の強い力を持つて希望とは異なる運命を彼女たちにもたらすことになるのである。

②嫉妬する妻の心情

次に指摘されるのは、紫の上や雲居雁といった嫉妬する妻たちの〈愛敬〉である。彼女たちの様子は一様に夫の心を惹き付ける。

いとおほどかに、うつくしうたをやぎたまへるものから、さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまへるが、なかなか愛敬づきて腹立ちなしたまふを、をかしう見どころありと思す。

〔「潯標」二二一九三頁〕

右は、「潯標」巻、光源氏に明石の君の存在を打ち明けられた場面の紫の上である。普段は包み隠している「執念きところ」を見せながら「もの怨じ」する紫の上にはかえって〈愛敬〉が宿り、光源氏に「をかしう見どころあり」と評価されている。嫉妬する紫の上の〈愛敬〉は、未だ光源氏の実質的な妻となる前、光源氏を夫にもつていう自覚が生まれた段階で物語に描き出されているため、彼女の造型をとらえる上でも重要な資質として注目される。

そして、嫉妬する雲居雁についても、夫夕霧のまなざしを介して〈愛敬〉が見出されている。象徴的なのは、夕霧が落葉の宮に執心する「夕霧」巻の一場面である。

「御心こそ鬼よりけにもおはすれ、さまは憎げもなければ、え疎みはつまじ」と、何心もなう言ひなしたまふも心やましうて、「めでたきさまになまめいたまへらむあたり」にあり経べき身にもあらねば、いづちもいづちも失せなむとす。なほかくだにな思し出でそ。あいなく年ごろを経けるだに、悔しきものを」とて、起き上がりたまへるさまは、いみじう愛敬づきて、にほひやかにうち赤みたまへる顔いとをかしげなり。

〔「夕霧」四一四七二～四七三頁〕

雲居雁は、嫉妬の情をあらわにする女性である。⁽¹⁶⁾ 右では、みずみずしい新鮮な魅力をお持ちのあなたに、連れ添うべき我が身でもないのだから、どこなりとも消えてしまいたい、と夕霧を責める。興奮に任せて夕霧に感情をぶつけながら起きあがる様子が、「いみじう愛敬づ」くのであった。夕霧は、感情もあらわに紅潮する妻の顔付きに、魅力を感じる。子供をたくさんもうけた彼等の夫婦関係は元来安定したものであった。夕霧が生活感溢れる妻にない要素を落葉の宮に求めたことも事実であった。夕霧が怒りをぶつける雲居雁に対して「愛敬」を見出し微笑を浮かべながら応対するのは、日ごろ母の役目に徹していた妻に眠っていた、女の情念を垣間見たからである。他の女性に魅力を感じる夫の心を引き戻す力が、女性の「愛敬」にはあるといえよう。

姫君たちの「愛敬」が無自覚に男性の心を大きく揺さぶるのに対し、妻たちの「愛敬」は自身の心の感情の揺らぎの表出である。この感情の揺らぎが夫には新鮮に映り魅力となる。どうやら「愛敬」の根本には、自身の心が揺らぐ、あるいは他者の心を揺らす力が孕んでいるようである。

③「罪」ある人間の美

人間が人間の心に揺さぶりをかける時、そこに強い愛執が生じることがある。この点において仏教上の罪という発想が意識されている。先述したとおり、物語中では「罪」という表現を伴うことが多い。男性に関する用例が少ない中、柏木に二度、「愛敬」が用いられていることをふまえると、男女間の不義密通と関わる傾向がある。

女君、顔はいとあかくほひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、あはれにらうたしと御覽ぜらる。

〔滯標〕二二二八〇～二二八一頁

右は、光源氏との関係をなじる朱雀帝の前で、顔を赤らめて涙を流す朧月夜の様子である。紅潮した顔に宿った「こぼるばかりの御愛敬」を目の当たりにした朱雀帝は、光源氏との密通を重ねた「よろづの罪忘れて」朧月夜に魅了される。朧月夜に関して「愛敬」はこの一例しか用いられていないが、朱雀帝が出家するまで彼女を手許に置いて寵愛した理由が描かれる、重要なくだりであろう。蠱惑的な朧月夜の「愛敬」が朱雀院の執着を呼び、光源氏と朱雀院の間で揺れる朧月夜の「罪」を誘発する。この後、朱雀院は光源氏を自らを比べ、卑下し、女の薄情をなじる。これは、帝としての言動ではない、愛執に満ちた一人の男の情念の告白であった。本人の自覚の有無にかかわらず、罪を負った人間が宿す「愛敬」は、断ち切れぬ愛執の連鎖を呼ぶ。『源氏物語』の「愛敬」は、仏教上の美德だけではなく、執着、

愛執という語感を持つ。「愛楽」や「愛行」の語感をも包括していると考えられる。

朧月夜の〈愛敬〉のあり方は、次に掲げる宇治中の君の資質とも通じるようである。

まろにうつくしく肥えたりし人の、すこし細やぎたるに、色はいよいよ白くなりて、あてにをかしげなり。かかる御移り香などのいちじるからぬをりだに、愛敬づきらうたきところなどの、なほ人には多くまさりて思さるるままには、これを兄弟などにはあらぬ人のけ近く言ひ通ひて、事にふれつつ、おのづから声、けはひをも聞き見馴れんは、いかでかただにも思はん、かならずしかおぼえぬべきことなるを、とわがいと隈なき御心ならひに申し知らるれば、常に心をかけて、しるきさまなる文などやあると、近き御厨子、小唐櫃などやうの物をも、さりげなくて探したまへど、さる物もなし、

〔宿木〕五一四三七頁

薫が自制心を押さえきれずに、中の君の手をとらえるという事件が起きた直後の、匂宮中の君夫妻である。匂宮は中の君の体に染みついた薫の残り香をかぎ分け「愛敬づきらうたき」中の君を前に、薫はただで許したわけがないと二人の関係を強く疑う。中の君の〈愛敬〉は、匂宮の猜疑を駆り立て、二夫にまみえるという仮想の罪を作り出してゆく。彼女の〈愛敬〉は、匂宮、薫、中の君の三者の関係性にゆさぶりをかける力を孕んでいるのである。この資質は、薫と匂宮の二人と通じることになる浮舟へも引き継がれてゆく。〈愛敬〉には異性の心を揺らす強い魅力から転じて、罪を誘発する力が内在しているのである。

④受領階層・女房たちのふるまい

異性を蠱惑する〈愛敬〉のあり方は、身分が低くなればなるほどあらわに、あからさまになる。宮家に生まれながら、女房格として出仕することとなった宮の君に注目したい。

…人づてともなく言ひなしたまへる声、いと若やかに愛敬づき、やさしきところ添ひたり。ただ、なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを、ただ今は、いかで、かばかりも、人に声聞かすべきものとならひたまひけんとなまうしろめたし。容貌もいとなまめかしからむかしと、見まほしきはひのしたるを、この人ぞ、また、例の、かの御心乱るべきつまめると、をかしうも、ありがたの世やとも思ひゐたまへり。

〔蜻蛉〕六一二七四～二七五頁

薫が宮の君と会話を交わす場面である。薫は宮の君の声に〈愛敬〉を見出しつつも、彼女が異性に向かって「人づて」ではなく声を発する身分へ落ちてしまったことを残念に思っている。同時に薫は、この体たらくでは、彼女が好色な匂宮の手に落ちるのも時間の問題で

あろうと考えてもいる。夫以外の異性に〈愛敬〉を振りまきすぎることは、女性の格を落とすことを意味するのである。

⑤近世語彙に近い〈愛敬〉

室町時代以降、〈愛敬〉は好ましい情感やしぐさを言う「愛嬌」という言葉へ変容してゆくとされている。『源氏物語』にはすでにその近世語彙に近い用例もある。第一には、人々が奏でる音楽の音色に関する用例である。

和琴に、大将も耳とどめたまへるに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に、掻き返したる音のめづらしくいまめきて、さらに、このわざとある上手どもの、おどろおどろしく掻きたてたる調べ調子に劣らずにぎははしく、大和琴にもかかる手ありけりと聞き驚かる。

〔若菜下〕四—一九〇頁

右では、紫の上の奏でた和琴の爪音に、夕霧が〈愛敬〉を見出している。夕霧がこれほど爪音に惹きつけられるのは夕霧が紫の上へ密やかな恋慕を抱いているためである。既に指摘されているとおり、夕霧と紫の上については密通の可能性が匂わされたまま、物語は進行する。夕霧の耳がとらえたのは、甘美でありながら背徳的な音色であった。これもまた、夕霧の愛執を喚起する〈愛敬〉である。

〈愛敬〉は、後代、美しい声や楽の音色で人々の心を惹きつける遊女の代名詞となつてゆく。

いづれか法輪へ参る道 内野通りの西の京 それ過ぎて や 常磐林のあなたなる 愛敬流れくる大堰川

（新編日本古典文学全集 三〇七、二六六—二六七頁）

『梁塵秘抄』『靈験所歌 六首』においては、媚態を振りまきながら美しく楽を奏でる大堰川遊女たちのことが〈愛敬〉と詠われている（頭注「媚趣の漂う意で、大堰川辺の遊女たちを思い寄せたか。」）。声色が男の心を捉えるのは、先の宮の君の例とも通じよう。宮の君の場合には特に、匂宮から情をかけられることが類想されているから、遊女的な造型が重ねられていようか。この点は稿を改めたい。

音色や声色に〈愛敬〉が不可欠であるという発想は、元来は仏教觀念から生じたと考えられる。天禄元年（九七〇）成立とされる『口遊』『伎芸門五曲』には、〈愛敬〉ある声が説法や唱導に携わる者の条件であると記されている。

一音。二弁。三形。四徳。五愛敬。〔謂之化他師。〕

一心。二初。三手。四勢。五力。六論。〔謂是博奕。〕

※へ内割注（『統群書類従』第三二輯上 平文社 八一頁）傍線部割注に見える「化他」は、他人を教化するという意味の仏教語である。仏法を広めるために〈愛敬〉が必要であるとされる点は、

先に引用した女の念仏の声が閻羅王の落涙を誘う『日本霊異記』の話とも通じる。しかし「化他」は、後代浄瑠璃や長唄を詠って人家の門口に立つ芸能者を意味するようになる。仏法を教化して尊崇を集めることと色事や芸能で人の心を魅惑することとの境目は薄れてゆく。それゆえ、「愛敬」という言葉にも、芸と春を売る遊女の意味が重ねられるようになるのである。したがって、『源氏物語』が、女性が男性の心を惹き付ける音色や声色に対して「愛敬」を用いていることは注目に値しよう。

第二には、婚礼を意味する用例である。「葵」巻、惟光が光源氏と紫の上の新枕を「愛敬のはじめ」と表現している。

惟光、たしかにもうけたまはらで、「げに、愛敬のはじめは日選りして聞こしめすべきことにこそ。さても子の子はいくつか仕うまつらすべうはべらむ」と、まめだちて申せば、「三つが一つにてもあらむかし」とのたまふに、心得はてて立ちぬ。〔葵〕二一七三頁

右は、中世以降の文献に現れる三日夜餅の別称「愛敬の餅」という言葉の源泉であろう。なお、地の文以外で「愛敬」という言葉を口に出す人物に着目すると、左馬頭、浮舟の母中将の君、浮舟の女房侍従など、卑賤な人間に限られる。右の惟光の発言にも、ついに北山で垣間見た少女と、主人光源氏が新枕を交わしたのだ、という民衆らしいやや猥雑なニュアンスが含まれるかも知れない。

以上の二点が、近世語彙へと影響を与えた用例であると考えられる。

（二）『源氏物語』の開拓した表現性——秩序に揺さぶりをかける「愛敬」

総じて『源氏物語』の「愛敬」とは、藤壺、女三の官、朝顔の姫君、あるいは葵の上といった、一等級の女性には用いられない。「愛敬」はそれ自体、心根の美しさをいうが、「愛敬」が過ぎると、異性を蠱惑し、執着をかき立てさせる罪を誘発することもある。物語は愛欲・煩惱と、慈愛・慈悲という対極的な語感を活かして登場人物を豊かに造型しているといえる。

重要なのは、他者によって見いだされる「愛敬」がこの物語においては、秩序崩壊の可能性を秘めるということである。

御声あてに愛敬づき、聞かまほしういまめきたり。古りがたくもおはするかな、かかれば、院の上は、恨みたまふ御心絶えぬぞかし、いまつひに、事ひき出でたまひてん、と思ふ。

〔「竹河」五一一〇八頁〕

「竹河」巻、薫が玉鬘と対面する場面である。玉鬘の魅力が衰えてないことを察した薫は、だからこそ冷泉院は彼女に執着を抱き続けるのだ、今にも何か、大事が引き起こされるに違いない、と推量する。薫は、玉鬘の声色から発せられた「愛敬」から、冷泉院の秩序が乱れる様な事態が起こりうると考えているのである。薫の予想は半ば的中する。先にふれたとおり、「裾まで、愛敬のこぼれ落ちたるやう」

であつた娘の大君が、母親玉鬘と同様に冷泉院に溺愛され、お妃たちの不興を買うことになるからである。玉鬘と大君の〈愛敬〉は、冷泉院の盲目的な執着を喚起し、後宮全体に波紋を広げる。これは〈愛敬〉を持たない妹の中の君が、今上帝に入内後、尚侍として安泰に暮らしてゆくことと対照的である。玉鬘母子の〈愛敬〉は、先に述べた朱雀院の執着を喚起する臘月夜、和琴の音色ひとつで夕霧の心を揺さぶり六条院の秩序を脅かす可能性をも秘める紫の上のそれとも通底していよう。『源氏物語』は不義の子である冷泉帝にすらこの言葉を用いない。その理由は、秩序破壊へとつながる語感が帝王を形容するにふさわしくないからではないか。秩序を打ち破る〈愛敬〉、これは漢語の語感を下敷きにしながらも作品が切り開いた表現性と言えるだろう。

また、〈愛敬〉があるとされる人物と、〈愛敬〉を見いだす視点人物との関係に着目すると、血のつながりのない親子であることが多い。紫の上、玉鬘と光源氏との関係が典型的であるが、他に秋好中宮と光源氏、宮の御方と紅梅大納言などが挙げられる。継子たちは皆無意識に父親たちの情欲をおおる。〈愛敬〉は、親子の秩序すら揺るがす資質として描き出されてもいるのである。

さて、光源氏の〈愛敬〉は、以下の二つの点に特徴がある。第一に、〈愛敬〉という言葉を用いるのはどちらかというと受領階級の間が多かったのに対し、光源氏の場合は内大臣、朱雀院という高貴な人物の発言であること、第二に、〈愛敬〉は一貫して評価される資質として語られているのに対し、光源氏に関してのみ〈愛敬〉があることが批判的に語られることである。果たして、光源氏の〈愛敬〉はいかなるものなのだろうか。

三、光源氏の〈愛敬〉

光源氏の〈愛敬〉は、例えば次のような場面に強調して描かれる。

「上も、年経ぬるとちうちとけ過ぎば、はたむつかりたまはんとや。さるまじき心と見ねば、あやふし」など、右近に語らひて笑ひたまふ。いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり。今は朝廷に仕へ、いそがしき御ありさまにもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるるままに、ただはかなき御戯れ言をのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞ戯れたまふ。

〔玉鬘〕三―一二〇頁

「玉鬘」巻、右近に戯れ言を言う光源氏の様子である。朱雀院がいうところの「うちとけて、戯れ言をも言ひ乱れ遊」ぶ姿が描かれる

場面であろう。微笑を浮かべる面相は、「いと愛敬つき、をかしきけさへ添ひたまへり」と強調されている。右では、朝廷に仕える多忙の身から解放された光源氏の余裕が語られている。注目したいのは「をかしく人の心を見たまふ」という行動である。光源氏は、自らの言葉やふるまいによって、極めて意識的に他者の心を揺さぶり、それを観察している。これは、〈愛敬〉ある人々が他者に対して無自覚であったことと対照的である。内大臣が本論冒頭で指し示しているのも、人の心を意識的に乱そうとするこの資質を言い当てているのではない。内大臣自身、苦々しい体験をしたことがあった。

「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人わろき名の後の世に残らむよりは、同じかざしにて慰めむに、なでふことかあらむ」と弄じたまふやうなり。かやうのことにてぞ、うはべはいとよき御仲の、昔よりさすがに隙ありける。まいて中将をいたくはしたなめて、わびさせたまふつらさを思しあまりて、なまねたしとも漏り聞きたまへかしと、思すなりけり。

〔常夏〕三一二六頁

「常夏」巻、酷暑の釣殿において、光源氏は内大臣家の子息の前で内大臣の子種の多さを愚弄する。右では、耳にした内大臣よ、「なまねたし」とでも聞くがよいと、他者の心が穏やかならぬことを望む光源氏の真意が明かされている。言葉によって人の心を翻弄し、揺るがそうとする光源氏の欲望は、古参女房である右近に向けられた戯れにも通じよう。内大臣と朱雀院、両者にとつて、第一部世界における光源氏との関わり合い全てが、葛藤の歴史であった。光源氏の兄朱雀院は朧月夜をめぐる一件において、内大臣は政争と、娘迎えの対決において、それぞれが手痛い体験をした。両者は光源氏が他者の心を揺らし、穏やかならぬ様子を鑑賞しようとすることを、身を以て知ったのである。光源氏の〈愛敬〉とは、そうした彼の本質が他者にもたらす因果を象徴する資質であったのだった。

さらに大切なのは、両者の脳裡には光源氏を溺愛した故桐壺院の記憶が共通して呼び起こされていることである。彼らはいわば、第一部世界を通して光源氏の政敵として存在した人々である。特に朱雀院は、「桐壺」巻をなぞるかのよう、桐壺院の「私物」であった光源氏の生い立ちを語り起こす。父院の溺愛はおそらく兄宮であった朱雀院の心を揺さぶり続けた。光源氏の須磨謫居の際、御階の下から睨むまなざしを身に受けながら、朱雀院は死してもなお光源氏へと注がれる父院の愛をまざまざと見せつけられたのである。桐壺更衣の悲劇が象徴するごとく、桐壺院の愛とは「人の心をのみ動か」す、他者の心を揺らし、秩序を崩壊する質のものであった（「桐壺」一一七頁）。光源氏という人間は、物語の始発から他者の心を揺さぶる業を背負って産み落とされていたのである。父院は、光源氏を限りなくいい人とおしい者と思し召し、大変なかわいがりようで、御身に代えて大切に思し召したものだ——〈愛敬〉という言葉をもって光

源氏を評する朱雀院の言葉は、言外に父院への愛の渴望を多分に含んでいる。

光源氏に関する〈愛敬〉の用例は、「須磨」巻以前には一例しか見られず「明石」巻以降に頻出する。「松風」巻、明石の君が光源氏にこぼれるほどの〈愛敬〉を見いだすくだりを見てみたい。

いたうそびやぎたまへりしが、すこしなりあふほどになりたまひにける御姿など、かくてこそもののしかりけれど、御指貫の裾までなまめかしう愛敬のこぼれおつるぞ、あながちなる見なしなるべき。

〔松風〕二一四一六～四一七頁

明石の君の目に飛び込んだのは、政界復帰を経て威風を帯びた光源氏の姿である。右の直前の場面において、光源氏は細心の注意を払って、自らの姿をひきつくる⁽¹⁸⁾っていた。明石の君の目に〈愛敬〉がこぼれおちるように映ったのは、貴族社会に返り咲いたことを明石一族に示し、彼らの印象を据え直すために光源氏が自らを意識的に仕立てたからである。いわばこれは、明石の姫君を我が方に引き取って養育し、入内へとつなげるための布石となる演出である。彼の〈愛敬〉は、人の心を意のままにし、時に乱そうとする意志が垣間見えるときに宿るのであった。

それでは、「須磨」巻以前は光源氏はいかなる描かれ方をしていたか。

暁方みなうち休みたり。君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどり歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いともものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。

〔須磨〕二二二八～二二九頁

「須磨」巻末、「そのさまとも見えぬ人」が立ち現れ、寝入った光源氏を脅かす。このとき光源氏とはつきに、自分の美質に見入り取り込もうとする霊物を想起し、「この住まひたへがた」しと恐怖感を抱いている。「須磨」巻に至るまでの光源氏の姿とは、いわば、光源氏自身身が戸惑い、時に翻弄される資質であった。光源氏自身がおそれを抱き、その資質を上手く乗りこなせない、いわば青年の美を宿していた。自らの資質を自覚し、使役し始めたときに、青年は壮年の政治家へと変化する。朱雀院によれば、光源氏の〈愛敬〉は年を取ること増幅するものだという。つまり、光源氏の〈愛敬〉が「明石」巻以降に繰り返し描かれるという事実は、異形のものに侵犯される危うさを失う代わりに、人心を掌握するようになるという光源氏の人物像の転換を意味しているのである。

おわりに

〈愛敬〉は、元来は美質そのものを指し示す表現ではない。他者の心を感応させたり、導いたりする宿命を宿した面相のことを指す。しかし『源氏物語』では、時に他者の欲望を駆り立て、あるいは人心を掌握し、秩序を崩壊させる可能性を孕む者に〈愛敬〉が宿る。これは漢語の語感を基調としながら『源氏物語』が切り開いた新たな表現性であった。

内大臣と、朱雀院は、自ら光源氏の美質に惹かれ、魅了されながらも、一方では葛藤や挫折を強いられてきた。第一部、第二部世界にまたがる両者の批評は、桐壺院の愛情というバイアスが、第一部世界を通してかかり続けていたことを明らかにしている。〈愛敬〉を強調することで、功罪併せ持つ多義的な光源氏のありようを物語の転換点において再照射したのであった。〈愛敬〉は、息子夕霧には引き継がれていない。「心用意」や「才」が優れる夕霧のあり方は、社会秩序を保たせようとする儒教の論理をたたき込まれた、臣下としての美徳そのものである。これは人臣の位を極め、体制の安泰を志向しながら後宮政策に執心する第三部世界の夕霧の造型へもつながってゆく。内大臣は、朝廷を脅かすのではなく天皇家からみつくり形で生き延びる藤氏の論理から、夕霧を絶賛しているのである。内大臣、朱雀院の批評は、父光源氏を通して評価された夕霧という人間が、第二部世界以降光源氏から乖離してゆく予兆を言い当ててもいるのである。

光源氏の〈愛敬〉は、光源氏自身が自覚することと有用な資質である一方、意識的に人の心を揺らし、秩序を崩壊させようとする異分子たる資質である。望むと望まざるとに関わらず、光源氏という人間は生涯、愛執というものから離れられない人間として造型されているのである。

註

(1) 『源氏物語』本文は新編日本古典文学全集に拠る。引用資料には便宜的に私に傍線を付した。また引用は一部常用漢字に直した所がある。

(2) 『極楽遊意』第九无量寿仏身想』には「无量寿仏若干量身遍軀相好。功德顕現。慈悲之相在眼。梵音之相在口。弘誓之相在面。神通之相在勢。智慧之相在眼

色。愛敬之相在蘭光。」とある（石田瑞麿「静照の『極楽遊意』」『仏教文学研究』法蔵館 昭和六二年 二二八頁）。「愛敬の相」が蘭の光に宿するという発想は、管見では『極楽遊意』をそのまま転用した『栄花物語』（たまのうてな 二―三〇四頁）以外では見あたらない。ただし、『日本霊異記』『法花経品を読む人を啓りて、現に口喙斜みて悪報を得し縁 第十九』には、仏法を侮ることによって「当に世に牙齒疎二欠け、唇醜く」なるとある（新編日本古典文学全集 七四頁）。美しい口元が仏教的に優れた資質であるという認識はあったのだろうか。『源氏物語』では、光源氏が空蟬と軒端萩を垣間見する場面で、軒端の萩の「まみ、口つき」が「いと愛敬づ」くと描かれていることが注目される（空蟬 一一―一二〇頁）。「口おほひ」という言葉があり、扇で口を隠すのが当時の女性の慣例である。「口つき」が「愛敬づ」という軒端萩の姿は、中の品の女性を見たことがなかった光源氏の目に衝撃的に映ったであろう。『愛敬』の有無は、女性の慎みや品格とは関わりがないようである。また、『総角』巻には、「齒うちすきて愛敬なげに言ひなす女」も描かれている（五―二五四頁）。したがって、『源氏物語』の時代にも口元が（愛敬）の有無を表象するという発想は残っているらしい。

（3）「みぎのうたをみかどのたまはせけるやう、めをするするはなをみけむぞあい行づいたるやとのたまはせければ、さだかたのあそむ、のぼるのあそむのすがたこそおもほゆれとそうしければ、御ときいとうて、さらばとてぢになさせたまふ」（『新編国歌大観』第五卷 角川書店 三三頁）。

（4）小西甚一氏は「敬愛」も同語と扱っている（『梁塵秘抄考』三省堂 昭和一六年 四二二頁）。こちらも「愛敬」と同語とみなすかは悩ましいところである。「愛敬」は元々「愛」と「敬」の独立した二語であったから、本来的には同義であった可能性は十分考えられる。「敬愛」の初期の用例は『続日本紀』にあるが、『源氏物語』には見えない。本稿は「愛」の語感を重んじるという先行研究に従って、「愛」を冠する場合のみを考察の対象とした。

（5）注（4）と同。

（6）『字音語難考』（『平安時代文学語彙の研究続編』風間書房 昭和四八年 三六九頁）。

（7）『古典基礎語辞典 日本語の成り立ちを知る』（角川学芸出版 平成二三年）。大野氏が指摘するとおり、『源氏物語』の写本では「愛敬」を「あい行」と表記するケースが散見される。

（8）「愛敬の相」の初出から数十年遡る『菅家後集』には、仏道を妨げる執着心、いわゆる愛欲のニュアンスで「愛楽」の用例が見える。四八四「敘意一百韻。五言。」には「微微に愛楽を抛つ」とある（頭注「すこしずつ愛敬・愛欲（ぎょうよく）」をすてて、欲望から遠ざかろうとつとめる」日本古典文学大系 四九四頁）。

（9）『曾我物語』衆人愛敬の御姿は時を追ひて泳々たり（新編日本古典文学全集 三〇頁）、「能楽論集 風姿花伝」されば、いかなる上手なりとも、衆人愛敬欠

けたる所あらんをば、寿福増長の為手とは申しがたし」(新編日本古典文学全集 二五九頁)。

- (10) 『孝経述議』卷第二「天子章」には、「愛惡俱在於心、敬慢並見於貌、愛者隱惜而結於内、敬者嚴肅而形於外、(義本、○義本作劉炫、)とある(林秀一『孝経述議復原に関する研究』文求堂書店 昭和二十八年 二二七頁)。

- (11) 山口仲美『源氏物語』の漢語(平安朝の言葉と文体)風間書房 平成一〇年 一四八頁)。

- (12) 内大臣は、近江の君に向かって一般の召使ですら名のりをする「親兄弟の面伏せなるたぐひ」も多いようだと言っていた(「常夏」三一―二四四頁)。これは、まして大臣である自分の場合はたいそうな恥となると言う嫌味である。

- (13) 大塚旦氏は、王朝仮名文学作品に見える〈愛敬〉について、関連して用いられやすい他の形容詞を掲げながら考究し、親しみ、明るさを意味する親愛的傾向を表す言葉と定義している(『「愛敬」考』王朝美的語詞の研究 笠間書院 昭和四十八年 二六四頁)。

- (14) 例えば、『大鏡』道長伝』には、女院詮子の伴僧が道隆、道長、道兼、伊周を親相したエピソードがある。未来、栄耀榮華を極めることになる道長の面相は「御かたち・ようていは、たゞ毗沙門のいき本みたてまつらんやうにおはします。御相かくのごとしといへば、たれよりもすぐれたまへり」と絶賛されている(日本古典文学大系 三三三頁)。後代、女の人相に宿る浮気心を素材とした、喜多川歌麿筆「婦人相學十牀・浮気の相」のような浮世絵も生まれる。仏画の枠を超えて、浮気という天稟民衆の「相」は絵画化され、共有されるようになるのである。

- (15) 物語では「心の中に、我はさは男まうけてけり、この人々の男とてあるはみにくくこそあれ、我はをかしげに若き人をも持たりけるかな、と今ぞ思はし知りける」(『紅葉賀』一一三二―一三三二頁)という紫の上の心内が語られる。のち、二条院に帰邸しながら光源氏が自分のもとへすぐに渡ってこないことを「なま恨めし」く思う様子が、あたかも「愛敬こぼるるやう」であると賞美されている(『紅葉賀』一一三三―二頁)。実際の婚姻関係を結んでいなくとも、紫の上が自覚的に妻としての意識を持っている場面であるといえよう。

- (16) 「若菜下」巻には、六条院女樂に参加し、うっとりとして帰邸した夕霧に対して「腹あしくてもねたまうちしたる」雲居雁の様子が〈愛敬〉づくど描かれている。このときも彼女は子だくさんの母親らしく「子どものあつかひを暇なく」こなして夫を迎えたのであった(四―二〇三頁)。

- (17) 高橋亨「可能態の物語の構造 ―六条院物語の反世界―」(源氏物語の対位法) 東京大学出版会 昭和五七年 四八頁)。

- (18) 畠山大二郎「光源氏の「ひきつくるふ」直衣姿 ―「松風」巻を中心として」(日本文学論究) 第六六冊 平成一九年三月)。